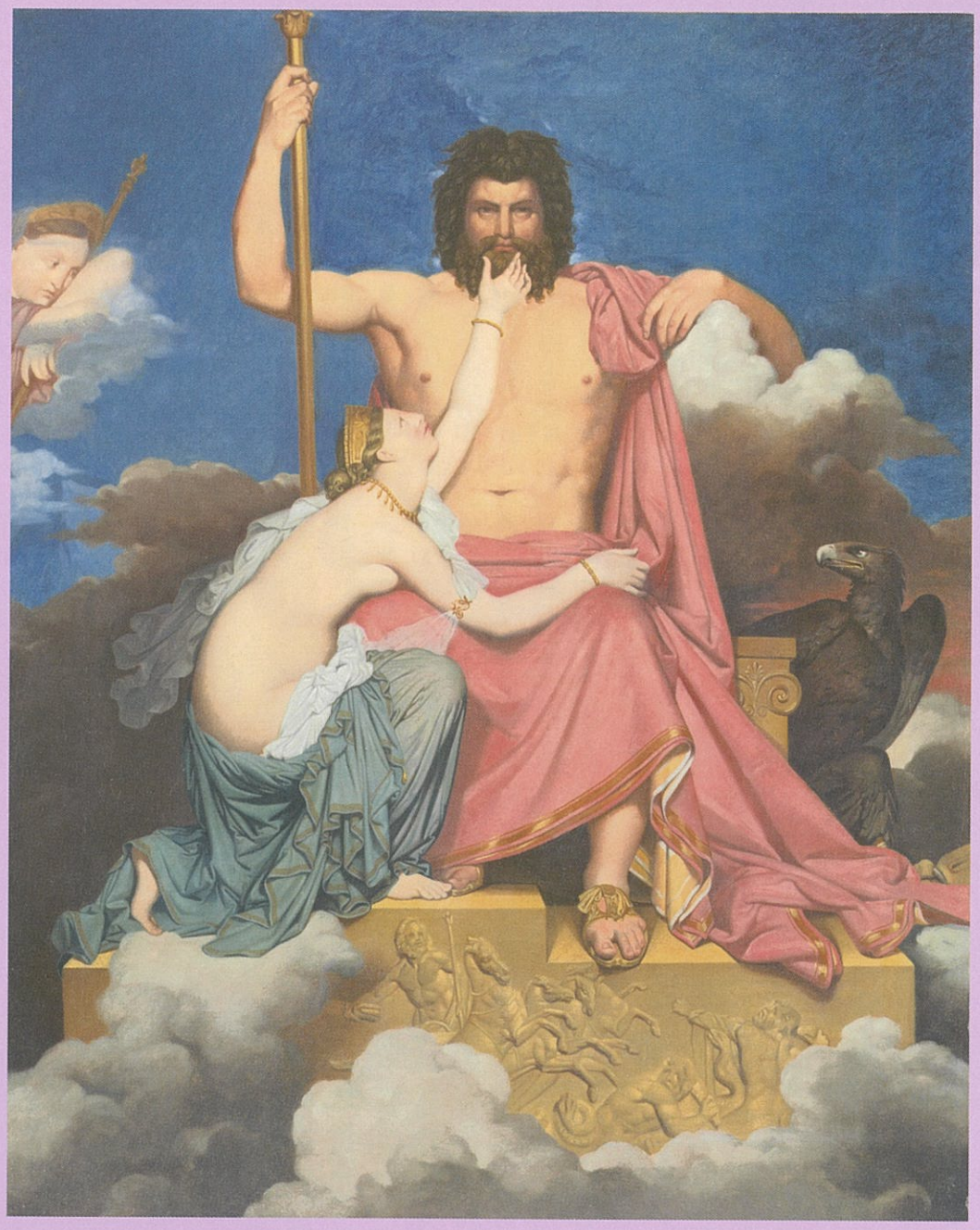
ARCADIA

82
SPRING 2020

Okazaki City Museum News



OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館
【マインドスケープ・ミュージアム】

岡崎市美術博物館ニュース
［アルカディア］

眼の極楽㉛

花と鳥のかたち

館長　榊原　悟

蜥蜴を描く

実はこの虫を含む花鳥画のもう一つの図像的淵源については、

常州草虫画

と呼ばれる一群の作品を、それと見ることで結着をみている。と云うより、いま問題としている、ことバージニア本に関する限り、その藍本すなわち直接的原図ともなった作品が常州草虫画にあるのではないか、との指摘もあるほどだ（河合氏前掲論考「室町時代大和絵の花鳥図」）。

確かに当時の日本では未だ目にすることさえ叶わなかったはずの鼻高栗鼠と南瓜とを一図のうちに描いた作（左隻第三扇）など、それら生き物たちの個別の図像情報を頼りに、絵師が自ら組合わせ一図に構成したとみるより、そうした草虫図そのものが既にあったとみる方が余程自然だからである。その舶載された一図の図柄を、ほぼそのまま準えた一問題の一図が、それである。しかもそこに登場する鳥や虫、小動物たちは、喰うか喰われるか、大自然の営みの相に描かれるなど、当時の日本の絵師たちが想像もつかない姿を示す（図1　頭高に狙われた尺取虫　左隻第一扇）。自余の諸図も同様の事情のもとに描かれたのだろう。むろんこれらは、当初より全十二図からなる揃いものであった。

図1：頭高に狙われた尺取虫　バージニア本　左隻第一扇

ただし、そうした諸図が日本にもたらされたとき、そもそも現にあるバージニア本のような押絵貼屏風の体をなしていたのか否か、常識的にはそう考えるのが自然だろうが、当時、既に屏風は東アジア世界において、広く日本の方物（特産品）として評価されていたことを思えば（榊原悟著『屏風と日本人』第一〇章屏風を贈る　敬文舎　二〇一八年）、そう断じてしまうのにも躊躇する。となると、十二幅一セットの掛軸であったのか。しかしそれをまた屏風に仕立て直すと云うのもおかしな話で、となれば、ここはいずれ押絵貼屏風にすることを前提に、舶載は未表装のままか、日本側の要請に基づいて屏風に仕立てられたか、であろう。が、いずれにせよ十二図は、特別に注文された可能性が高い、とみてよいだろう。中国画である限り、その絵は紙に描かれるはずもないだろうから、材質は絹本であったに違いない。バージニア本のモチーフの特異さが、こんな想像までもかきたてさせるのだが、或いはこの点を検証していけば、本屏風の制作事情の解明につながるかも知れない。

図2：喰瓜栗鼠図　山田道安筆

興味深いのは、そのバージニア本の「鼻高栗鼠に瓜・南瓜」に酷似する図を、戦国期の武人画家山田道安（大和国の戦国大名筒井氏の一族）も描いている点である。『喰瓜栗鼠図』（図2　六三．六×三五．〇センチ　茨城県立歴史館蔵）で、むろん道安の制作にもお手本があったはず。バージニア本の一図をそれとみることも不可能ではないが、そうして二点の作品を結びつけることより、ここはむしろ広く両図に共通する祖本＝図像情報があったことと、その情報をもう一人の絵師道安も得ていたことを指摘するに留めたい。モチーフ選択の特異さが二人の絵師にそれを写さしめたのだろう。そしてその両図に共通する図像的淵源（祖本）となったものこそが、特別に注文されたと推定した、あの絹本の草虫図ないしはそれに基づく図像情報＝粉本ではなかったか。当然その屏風絵は、既に知る人ぞ知る存在であったに相違ない。現在バージニア本各図に禅僧たちの賛詩が、それ

も写本のかたちで伝わること自体（島尾新「伝土佐光信筆　花鳥草蟲図押絵貼屏風」『国華』一二〇一号　一九九五年）、バージニア本の原図となった祖本の、そうした名物性と特別の位置を証左するものではなかったか。

となると俄然気になるのは、『本阿弥行状記』中巻一七七の記事である。すなわち次のように云う。

虫の絵屏風中屏風也。秋草に数の虫有。頼朝公御所持、其後代々将軍家の御添状有之。豊臣殿下御上覧之節、蜥蜴を御嫌いの由にて差心得、絵を切抜繕置候上にて御上覧に入候処、公眼早く繕ひ候処新敷候故御見咎有之、様子御聞の上甚だ御立腹有之、持主へ御直筆の御断状添有之、後二条の御城にて当時将軍家御上覧有之候由。余は折悪く拝見不致残念、噂にて承認置。絵筆者小栗宗丹なるべしぞ、印は無之とぞ。

正木篤三著『本阿弥行状記と光悦』中央公論美術出版　一九六五年

この記事自体伝聞に基づき、本阿弥光悦（一五五八～一六三七）自身、ここに云う屏風絵を見ていないようで、「頼朝公所持」などという荒唐な誤伝を含むのもそれ故だろうが、伝える内容は実に興味深い。

それによれば、当時二条城には上洛した徳川将軍も見たと云う、まさしく名物と呼ぶに相応しい「虫の絵」の「中屏風」が在ったらしく、それは遡れば足利将軍の所縁にも繋がるものであったと云う。その屏風には「秋草に数の虫」や「蜥蜴」などが描かれていた。バージニア本にも蜥蜴が描かれていたはずだ（図3　右隻第三扇）。虻をジッと見つめる。まさしく営みのかたち、である。となればバージニア本こそは、この秀吉上覧本そのものではないか。蜥蜴という異色のモチーフが共通するだけに、そんな想像もしたくなるのだが、残念ながら両本は別もの。それと云うのも上覧本は、上覧に際し秀吉が蜥蜴を嫌いだからと、あらかじめその部分を切り抜いたようだが、バージニア本にはそうした痕跡＝繕いの跡が無いからである。

とは云え全くの無関係と断定するのも躊躇われる。蜥蜴が登場する以上、上覧本には秋草だけでなく、夏草も描かれていたことは疑いなく、バージニア本のような押絵貼の可能性が高いのではないか。しかも筆者を、足利将軍家に仕えた御用絵師小栗宗丹（宗湛　一四一三～八一）と伝える。その当否について、作品も伝存しない現状では如何ともし難いが、後述するように宗丹は、虫を描いた作の伝承筆者として、しばしば名の上がる絵師である。上覧本の絵師として何不足ないのだが。

その宗丹でさえ蜥蜴に着目し、これを描くについては、それ相応の飛躍が必要であったはずだ。言うまでもない、それ以前の視覚が捉えきれていなかったものを取上げ、絵にするとは、それほど大変なことだと考えるからである。それは見たこともない鼻高栗鼠や南瓜を描く場合だけではない。むしろ蜥蜴のような日常ごく普通に目にするものこそ、もの珍しさや貴重さがないだけに、敢えてそれを絵に取上げる必要もなかったはずだろう。

歌に詠まれることもなかった蜥蜴である。掛詞、縁語もない。と云うより王朝以来わたしたちの先祖には蜥蜴をまともに見る機会すらなかったのではないか。鳥毛虫を愛で、蟷螂、蝸牛を集めたあの「虫めづる姫君」でさえ、さすがに蜥蜴までは、と云うところか。いや、秀吉のように嫌悪の情を抱く者さえいるではないか。そんなところに、そもそも蜥蜴の歌や絵、さらに文化が生まれるわけもない。

その蜥蜴を、上覧本もバージニア本の絵師も描いた。従来の視覚が見ることもなかった蜥蜴を、である。当然、それを可能にさせた事情があったはずである。もとより絵師たちがモチーフとして蜥蜴を自らの目で見出したわけではあるまい。あくまでそれは外発的要因による。先に「それ相応の飛躍が必要であった」と述べたのも、この謂である。そして、その外発的要因となったものこそが、明より新たにもたらされた花鳥画、すなわちバージニア本と道安本、そして上覧本、三本のお手本となった特別誂えの絹本の一本ではなかったか。その一本を誂えたのが足利将軍と見れば、何より『本阿弥行状記』が伝える足利将軍家所縁の屏風絵との記事も活きるし、その屏風絵を写すことが出来るのは将軍の御用絵師とみれば、上覧本の絵師が小栗宗丹だという伝称も生きるのではないか。

では、それら蜥蜴を描いた諸本の、そもそもの原図となった一本を生み出した常州草虫画とは、一体、どのような作であったのだろうか。そこに蜥蜴が登場することは言うまでもないのだが……。

図3：
虻を見つめる蜥蜴　バージニア本　右隻第三扇

Special Exhibition
特別
企画展

会期：2020年4月4日(土)～5月17日(日)

西洋近代美術にみる
神話の世界

Metamorphosis of Classicism and Mythological Theme in the Art of 1750s-1980s

髙見　翔子

二〇二〇年度最初の展覧会は、特別企画展「西洋近代美術にみる　神話の世界」を開催します。本展では、十八世紀半ばから二〇世紀にかけての作家を採り上げ、ギリシャ・ローマ神話や古典古代を主題とする作品とその変遷を全五章の構成で展観します。今回は、展覧会の構成に沿って各章のみどころをご紹介します。

序章　古(いにしえ)なるものへの憧れ

ルネサンス以降、ヨーロッパの宮廷人や君主たちに愛されたギリシャ・ローマ神話を主題とする美術は、古代美術の影響から、古代の理想像を描き出そうとしてきました。その背景には、西暦1世紀後半に火山の噴火によって埋没したローマ時代の町として知られる、ヘルクラネウムやポンペイの古代遺跡の発掘をきっかけにヨーロッパ中に広まった古代愛好がありました。

優れたデッサン力と銅版画技法による版画集を出版したジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ（図1）は、考古学的要素とフィクションを交えながら古代都市の幻想的なイメージを描き出しました。

図1：ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ
《スキピオのものと考えられている墓》
（『ローマの古代遺跡』より）　1756年刊行　エッチング・紙
町田市立国際版画美術館蔵

第Ⅰ章　甘美なる夢の古代

古代美術のコレクションや、ピラネージによって創出された古代都市の幻想的なイメージは、そこで営まれる生活や物語の情景に想像を誘いました。

とりわけ、ヴィクトリア朝時代のロイヤル・アカデミーを代表する画家、ローレンス・アルマ＝タデマ（図2）らによって描き出された、儚さをまとう優美な女性像も特徴的です。

図2：
ローレンス・アルマ＝タデマ《お気に入りの詩人》1888年　油彩・パネル
リヴァプール国立美術館　レディ・リーヴァー・アート・ギャラリー蔵
Courtesy National Museums Liverpool, Lady Lever Art Gallery

第Ⅱ章　幻想から伝統へ

イギリスのロイヤル・アカデミーが十八世紀後半に設立されるよりさらに古く、十七世紀に設立されたフランスの美術アカデミーでは、古代とルネサンスを規範とする制度化された美術教育のもと、コンクール「ローマ賞」が設定されました。

十九を通じて、神話主題は、聖書や歴史の主題と並んで官展サロンで重要視されました。また、神話が持つ神秘的な雰囲気は新しい表現の着想源となりました。世紀末を生きたオディロン・ルドン（図3）らは、同時代の象徴主義的な文学や音楽の影響を受けて神話の登場人物を暗示的に描き出しました。

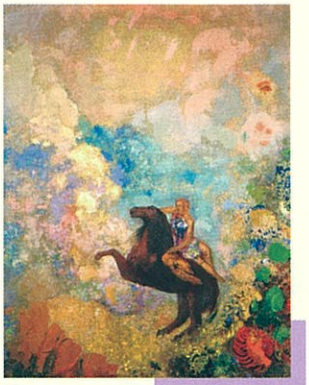


図3：
オディロン・ルドン
《ペガサスにのるミューズ》
1907－10年　油彩・カンヴァス
群馬県立近代美術館蔵

第Ⅲ章　楽園の記憶

古代ギリシャの詩人テオクリトスの『牧歌』を元祖とする田園詩の伝統は、古くから都市の住人が自然と調和した生活に憧れを抱いていたことを示しています。

古典主義に傾倒した一八八〇年代以降のピエール＝オーギュスト・ルノワール（図4）は、泉で水浴をする女性の姿を、胸と下腹部を手で隠す「ウェヌス・プディカ（恥じらいのヴィーナス）」のポーズをとるように描きました。海から上がるヴィーナスや泉のニンフに重ね合わせて表現されたイメージは、水浴する現代の女性像と結びつけられています。

第Ⅳ章　象徴と精神世界

第一次世界大戦後の一九一八年頃から一九三〇年代後半にかけて、美術は本格的な古典回帰の傾向を見せます。そこには、政治的な分断のなかで、人々がヨーロッパ精神の源泉である古典古代によりどころを求めたという背景があります。また、この時期はキュビスムをはじめとする芸術運動が次々と展開した後、そこに参加した作家たちが新しい表現を模索していた時期でもありました。

例えば、ピカソのミノタウロスは、一九三〇年代を中心にいくつかの作品に現れ、人間の獣性の象徴であるとともに、画家本人の分身として表現されています。このように、不安定な時代の空気のなかで、作家たちは各自の手法で古代の精神を継承することを試みます。

田園や森に戯れる神々や半神たち、そしてその庇護を受ける人間たちが恋や冒険を繰り広げるギリシャ・ローマ神話は、近代ヨーロッパの人々の古典古代への憧れを契機に、豊かな広がりを見せてきました。時代を経るごとに様々な解釈や創作が加えられ、多彩な表現へと展開していく過程をぜひご覧ください。

図4：
ピエール＝オーギュスト・ルノワール
《水のなかの裸婦》1888年　油彩・カンヴァス
ポーラ美術館蔵

関連イベント情報

講演会やコンサートをはじめ、「神話の世界」展関連イベントを開催します。春の週末は、岡崎市美術博物館へぜひお越しください!!

◆講演会「“美神のサロン”の画家たちとその時代」　4月25日(土)　午後2時～

講師：栗田秀法氏（名古屋大学大学院人文学研究科　教授）

会場：当館1階セミナールーム　　定員：70名（先着順）※当日午後1時30分から整理券配布・開場。※聴講無料

◆スペシャルレクチャー「神話と古代をテーマとした美術の基礎知識」　5月3日(日・祝)　午後2時～

講師：佐藤聖子氏（群馬県立近代美術館　学芸員、本展企画者）

会場：当館1階セミナールーム、展示室　　定員：50名（先着順）

※当館1階セミナールーム前にて当日午後1時30分から整理券配布・開場

※聴講無料（ただし当日の観覧チケットが必要です）

◆コンサート　4月11日(土)　午後1時30分～

岡崎市シビックセンター presents「みんなの音楽学校　出張編～いま音楽で神話を愉しむためのいくつかの短章～」

講師：松本大輔氏（クラシック音楽専門通販ショップ　アリアCD代表）

出演：簗瀬彩氏（ヴァイオリン）、酒井黎子氏（ピアノ）

会場：当館1階セミナールーム　　定員：70名（先着順）※当日午後1時から整理券配布・開場

※参加無料（ただし当日の観覧チケットが必要です）。※その他の詳細は、当館ホームページにて掲載予定です。

協力：岡崎市シビックセンター

◆ワークショップ「神話の世界　オリジナルフラワーアレンジメントをつくろう」

ウォーターハウスの描いた、花を摘む「フローラ」の姿に思いを馳せながら、ハート型の花籠いっぱいに

プリザーブドフラワーやドライフラワーを使って、お花畑のようにお花をアレンジしましょう。

講師：市川薫氏（プリザーブドフラワー教室　ficio主宰）

【大人コース（高校生以上）】　**4月18日(土)　午前10時30分～、午後2時～**

定員：各回10名ずつ（1度の申込みは2名まで）　参加費：各回ともひとり1,000円（アレンジメント1個制作）

【親子コース（4歳～中学生まで）】　**4月19日(日)　午前10時30分～、午後2時～**

定員：各回5組ずつ（1組2名まで）　参加費：各回とも1組1,000円（アレンジメント1個制作）

※各コースとも事前申込制（申込方法の詳細は、当館ホームページにて掲載します）。応募多数の場合は抽選。

場所：当館1階展示室前

ただいま準備中！

Exhibition 企画展

会期：2020年5月30日(土)～7月12日(日)

岩合光昭写真展
どうぶつ家族／ねこ科

湯谷　翔悟

美博が岩合さん一色になるひと月半です。

岩合さんといえば、もはやねこの写真家の第一人者といっても過言ではないでしょう。岩合さんがおよそ40年に渡り撮り続けてきた数多くの写真を紹介する『世界ネコ歩き』や『ネコライオン』など、ねこの魅力が余すことなく表現された展示が全国各地で開催されています。今これをお読みの方の中にも、これまで岩合さんの写真展に行ったことがある方もいらっしゃるかと思います。そんな中せっかく美博でやるんだから、他とは違う展示ができたらと思い、今回は「どうぶつ家族」と「ねこ科」の二つの企画を同時開催することにしました。

「どうぶつ家族」は世界中で生きる多様な動物たちの姿をはじめ、生命の循環・つながりをテーマに、写真作品約一五〇点を紹介する展示です。大学在学中に訪問したガラパゴス諸島で野生の世界に魅了されて以来、世界中を駆け巡りってきた岩合さん。この「どうぶつ家族」では、アフリカのサバンナに暮らすゾウやキリンから、北極のシロクマやペンギン、さらにはハワイ沖を泳ぐクジラまで、大自然の中の動物を活き活きと写し出しています。動物写真家・岩合光昭氏の真骨頂ともいえる、担当者としてはぜひともご覧いただきたい展示内容です。

©Mitsuaki Iwago

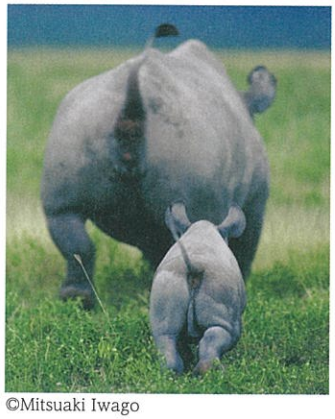
©Mitsuaki Iwago

もうひとつの「ねこ科」は、その名のとおりイエネコをはじめライオン・トラ・サーバルなどのネコ科動物だけを集めた写真展です。他とは違う展示と言いながら、「結局ネコなのね」と思うなかれ。この「ねこ科」は数ある岩合さんの企画の中で、初めての屋外写真展なのです。配置は鋭意検討中ですが、森の中の写真は木の近く、川や海で撮られた作品は水辺にというように、写真作品と実際の美博周辺の環境がリンクして、あたかも自分が写真の中に入り込んだような工夫をする予定です。最大二メートル級の大型作品約六〇点を美博周辺に配置し、時々刻々と変化する環境の中で作品を楽しむ、普段の展示室だけで行う展示とは異なる趣向をこらします。

会期中は岩合さんもお越しになり、お話とサイン会を開催する予定です。混雑が予想されますので、事前申込み・抽選となってしまいますが、みなさま奮ってご応募ください。

普段「敷居が高い」「小難しい」などのお言葉を頂戴することもある当館ですが、この岩合光昭写真展は大人から子どもまで、みなさまに楽しんでいただける展示です。ねこ好き・どうぶつ好きの担当としても、図録を見ながら「かわいいなぁ～」とニヤニヤして企画している日々です。目下の心配は、会期中設置される特設ショップで散財しないかということ…

「自然と調和するミュージアム」がコンセプトのひとつである当館で開催する、ほかとは一味違った岩合光昭写真展に、ぜひお越しください。



©Mitsuaki Iwago

本多家シンポジウム

板谷　寿美

二月十六日(日)、岡崎信用金庫本店の大ホールで、本多家シンポジウム「徳川四天王本多家と家臣たち」が開催されました。本多家が岡崎藩主として入封してから二五〇年を記念して行われました。

今回のシンポジウムは三部構成で、はじめに小宮山敏和氏（国立公文書館）による基調講演「徳川四天王と家臣たち」が行われました。次に水野伍貴氏（株式会社歴史と文化の研究所）、石神教親氏（桑名市役所）、湯谷（当館学芸員）による個別報告がありました。最後に、報告者四名と司会の堀江（当館学芸員）によるパネルディスカッションが行われました。

講演・報告・パネルディスカッションいずれも充実した内容で展開され、今後の研究の進展に期待が高まります。

最後になりましたが、ご登壇くださった小宮山氏、水野氏、石神氏、シンポジウム開催にあたりご協力を賜りました岡崎信用金庫様・岡崎商工会議様、そして当日足をお運びくださった多くの来聴者の皆様に厚く御礼申し上げます。

会場内聴講者の様子

パネルディスカッションの場面

美術博物館　広報あれこれ

酒井明日香

展覧会の開催にあたっては、展覧会自体の準備を進めるのはもちろんですが、周知のために様々な広報も行っています。令和元年度に実施した広報について、一部ご紹介いたします。

まずSNSの活用では、フェイスブックとインスタグラムの2つを利用しています。展覧会開会前に文章や写真を用意する市政だよりやホームページでの広報とは異なり、その時々で展示作品・資料やイベントの写真を撮影したり文章を書いたりしながら、当館の旬の情報をお届けしています。

＼ぜひご覧ください！／

▲Facebook

▲Instagram

OKAZAKI_CITY_MUSEUM

また、新たな試みとして割引券等にも工夫をしました。コースター型を制作したり、しおりとしても使えるサイズで作成して書店様に設置いただいたりしました。好評なものは数日でなくなってしまったこともあり、反響に手ごたえを感じています。また、特別企画展「琉球の美」の関連イベント「海風フェア」では、会場案内をうちわ型で作成しました。暑い時期の開催だったため、たくさんのお客様にうちわとしてもご活用いただきました。

今後も、みなさまに展覧会を知っていただき、楽しんでいただける広報を目指していきます。どうぞお楽しみに！

広報の制作物

2020年度展覧会紹介

■マイセン動物園展

7月25日(土)～9月13日(日)

マイセンのリアルで愛らしい動物作品が大集合！

最高級の芸術性と品質を誇り、世界中の人々が愛してやまないマイセンの作品群から、動物に関連する作品に注目します。マイセン磁器により表現された動物たちがみせる様々な表情や愛らしさ、躍動感やリアルさなどを通じて、マイセンの魅力、とりわけ造形技術の高さをご紹介します。マイセンファンはもちろん、動物好きの方や親子でお楽しみいただける展覧会です。

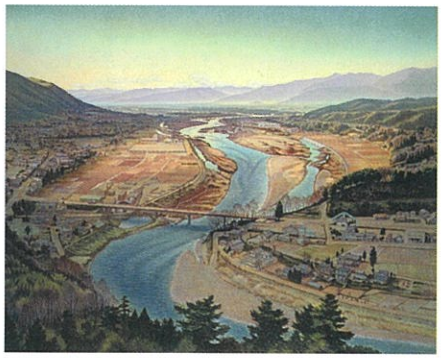
オットー・ピルツ
《二頭のキリン》
1907－1923年頃
J's collection

■郷土ゆかりの画家　中根寛展

11月28日(土)～2021年1月11日(月・祝)

中根芸術の全貌と軌跡をたどる大回顧展

2018年、92歳でその生涯を閉じた郷土ゆかりの画家中根寛。東京芸術大学の教員として長きにわたり後進の育成にあたり、現代日本洋画壇を牽引してきました。本展では、中根の画壇での地位を確固たるものとした風景画を中心に、初期から晩年までの作品を展示し、その画業を振り返ります。



中根寛《犀川（信州）》　1992年　岡崎市美術館蔵

■畠中光享コレクション インド・ミニアチュール展

9月26日(土)～11月8日(日)

華麗なインド・ミニアチュール

日本画家でインド美術研究者の畠中光享氏が収集し続けているインド・ミニアチュール（細密画）が一挙大公開。日本では見ることができない優れたミニアチュールの貴重なコレクションです。

インドには「人と絵画と対話するために絵画がある」という考え方があります。この秋、1対1で絵画に向き合うゆったりとした時間を、楽しんでみてはいかがですか？

《楽器をもつ女》　キシャンガル　1760年頃

■暮らしのうつりかわり

2021年1月23日(土)～3月21日(日)

魅せます！土人形　素朴な造形美の魅力

昔の生活道具を中心に紹介しながら、私達の暮らしがどのように変わってきたのかをたどる展覧会の9回目。今回は、粘土を焼成し彩色する「土人形」を一挙に紹介します。土人形は節句物、縁起物として日本各地で作られ、かつては庶民の間で子どもの誕生や成長の節目ごとに買い足された郷土玩具でした。収蔵する土人形を地域別または題材別に紹介しながら、素朴で郷土色豊かなその魅力に迫ります。

土人形《高砂》　当館蔵

編集後記

2020年度が始まりました！今年は、神話主題の西洋美術、可愛らしい動物たちの写真、彫刻的なマイセンの磁器、ユニークなインドのミニアチュール（細密画）、岡崎を代表する画家のひとりである中根寛、愛らしい素朴な土人形と豊かなラインナップを予定しております。私は、3月をもって4年間お世話になった岡崎市美術博物館を離れることになりました。みなさまには、大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。引き続き岡崎市美術博物館とアルカディアをよろしくお願い申し上げます。(髙見)

表紙図版：ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル《ユピテルとテティス》1807－25年頃
油彩・カンヴァス　東京富士美術館蔵

OKAZAKI MINDSCAPE MUSEUM
岡崎市美術博物館
【マインドスケープ・ミュージアム】

開館時間：午前10時～午後5時
（入場は午後4時30分まで）
休 館 日：毎週月曜日
（祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日）

http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html

[岡崎市美術博物館ニュース／アルカディア]　第82号　2020年3月発行
編集・発行　岡崎市美術博物館（マインドスケープ・ミュージアム）
〒444－0002　愛知県岡崎市高隆寺町峠1　岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000（代表）

ARCADIA